

ごすことができました。特に、普段親しく話をする機会のほとんどなかった異なる分野の研究者の方々と親睦を深めることができたのは大きな収穫でした。しかし、このSSORで生まれた新たな交流も、何もしなければたまに研究発表会で会ったときに挨拶するだけの関係に終わってしまうだろうとも感じました。今回のSSORで得たものを今後の研究活動で最大限活用できるよう、参加者の1人1人が工夫していく必要があるかと思います。また、今回のSSORを終えて、研究部会を超えた横断的な交流を促進するイベントの重要性を感じることができました。

今後もさまざまな分野の研究者が交流する機会が得られれば嬉しく思います。

SSOR 2007は、OR学会前研究普及理事の田村明久先生、実行委員を務めていた根本俊男先生、堀田敬介先生、塩浦昭義先生を始めとする多くの関係者の皆様のご尽力によって開催することができました。また、今回のSSORが大変に盛り上がったのは学生・若手の皆さんのがんばりによる部分が大きく、SSORの目的が十分に果たされたと思います。この紙面を借りて、関係者の皆様に改めて感謝したいと思います。

平成19年秋季研究発表会ルポ



後藤 順哉（中央大学）、武田 朗子（東京工業大学）

土村 展之（東京大学）、八木 恭子（東京大学）

1. はじめに

平成19年秋季研究発表会が、前日の創立50周年記念式典・講演会に続き、去る9月27日、28日に政策研究大学院大学六本木キャンパスで開催された。今回の研究発表会は、特別講演が2件と文献賞受賞招待講演、さらに学会創立50周年を記念した国際セッションが設けられ、一般研究発表126件、参加者総数400人超の盛会であった。

会場となった六本木キャンパスの近くには、東京ミッドタウンや六本木ヒルズなど、昼夜問わず魅力的なスポットがたくさんあり、大学までの道のりがとても長く感じた人も少なくはないのではないだろうか。また、キャンパスは、今年オープンしたばかりの国立新美術館のガラスの織りなす曲線美が印象的な斬新な建物と向かい合っているが、大学の建物も負けず劣らず、吹抜けのテラスやガラス張りのエレベータが近代的な空間を作り出していた。

2. 研究発表会：1日目

特別講演：前日の記念式典に続き、INFORMS会長であるBrenda Dietrich氏による特別講演が行われた。講演に先立ち伊倉義郎氏（サイテック・ジャパン株）から、E. Johnson氏やR. Gomory氏に続く、

OR分野3人目のIBMフェローであることが紹介され、また、香田正人氏（筑波大）からはIBMの研究所に赴任したときの上司であったといった逸話が紹介された。

講演序盤では、もの凄いスピードでINFORMSのあらましについて説明があった。かつてINFORMSのAnnual Meetingに参加したときにはその参加者数に驚かされたが、現在の会員数は約12,000名、秋のAnnual Meetingでの発表件数は3,500近いということで、あらためてその圧倒的な規模に驚かされた。その後、近年のINFORMSの“Science of Better”キャンペーンやIBMの“Service Science”に象徴される、より統合的な実務へのORの適用に関して多くの時間を割き説明された。日本ではアメリカに比べるとこの手のキャンペーンが盛んでないように思えるだけに、INFORMS会長がその講演時間の多くをこれに割いて説明する様子からは、その力の入れようが伝わってきた。

講演後の質問では、現在OR学会が抱える悩みである、“アカデミックと実務家との距離”に関連して、INFORMSではどのような工夫をしているのかといった点に複数の質問が及んだ。それに対しDietrich氏は「秋の（研究者向けの）会議は大変大規模で50ものパラレル・セッションで構成される一方、春の会

議はチートリアル形式で“OR 手法が会社にとってどれだけ貢献しているか”について重点を置いて話してもらっている」といった工夫を紹介された。これは、本学会にとっても大変参考になるのではないだろうか。

国際セッション：休憩時間を持ち、国際セッションとして、Xiang-Sun Zhang 前中国 OR 学会会長、Sung Joo Park 前韓国 ORMS 学会会長、Elise del Rosario IFORS 会長、Brenda Dietrich INFORMS 会長の順で、4名の来賓による短めの基調講演と日本OR学会側から伏見正則氏（南山大）、高森寛氏（千葉商科大）、大山達雄氏（政策研究大学院大）、香田正人氏（筑波大）をパネリストに、パネル・ディスカッションが行われた。

4名の来賓のご講演はそれぞれが関わられる組織の歴史、現状に関する報告と日本OR学会との関わり、そして今後の展望に関するものであった。Zhang 氏は日本OR学会にも多くのご友人がいるということであつて国際会議などの折りに撮られた写真を多数披露されたのが印象的であった。Park 氏はORの技術がパッケージの中に埋め込まれることで露出が少なくなっている現状を踏まえた上で、サービス分野への重点のシフトを展望すると同時に、日本のORに“Science of Kaizen”(with “カイゼン精神”)の推進を希望されていた。del Rosario 氏はIFORSの順調な成長を非常に前向きに語られる一方、現在のORに足りないものとして、ORが知られていないことを指摘されていた。Dietrich 氏は特別講演での講演で話されたこともあり、手短なコメントをなされていたが、前3者の中で Park 氏の指摘に興味を示し、研究者がもっと実務家にORを広めるべきであることを再度強調していた。

4名の基調講演で残り時間がかなり少くなってしまったが、最後に日本側から4名のパネリストが4名

の来賓の講演に関連した質問やコメントを呈し、それに対する応答をもって、国際セッションは終了した。洋の東西、組織の大小を問わず、OR関連学会が抱える問題（悩み）がある部分共通していることを認識できたのは興味深かったし、またそれぞれの取り組みについて情報の交換ができたという点で、有意義な企画であったと思う。

一般講演：今回の研究発表会では、126件の講演が7会場に分かれて行われた。セッション名がいつもとは異なり「人の流れ」「インフラストラクチャ」「リアルオプション」等、これまでに見たことのない名前が付けられていたことが面白いと感じた。にもかかわらず、筆者の興味が重なってしまい、限られたセッションのみの報告となってしまったことをあらかじめご容赦いただきたい。

「ポートフォリオ戦略」セッションの吉田祐治氏（北九州市立大）による「A Risk-Minimizing Problem under Uncertainty in Portfolio」では、ファジイ確率変数を用いたポートフォリオの構築とその評価について紹介された。磯貝明文氏（MTEC）による「MBP モデルとリスクバジェッティング」では、各セグメントごとに情報を持っているマルチベンチマーク・ポートフォリオモデルのリスク予算の割当てに着目し、実簡易データからの構築モデルを用いた評価を報告された。佐々木大輔氏（電気通信大）による「ICAPMに基づく売買情報を用いたポートフォリオ戦略」では、ICAPMという古典的ながらあまり実装されていないモデルによって、日本市場の株式の売買情報の有効性が検証された。山本零氏（MTEC）による「絶対偏差を用いた Maximal Predictability Portfolio の構築と評価」では、決定変数を定義するバラツキの指標に絶対偏差を用いることで MPP 構築問題を定式化し、先行研究より大規模問題が高速に解けることを示された。

また、8月に伊東のホテルで3日間にわたって行われたSSORに関わる特別セッションが設けられた。まず根本俊男実行委員長（文教大）からSSORの報告がなされた。1998年を最後に中断していたSSORを創立50周年記念事業として復活開催したもので、参加者総数160名弱の過去最大規模、ビール消費量も中瓶513本にも上った、とのことだった。実際参加した立場からすると、ビール以外の（“濃い”お酒の）消費も相当なもので、単なる研究交流以上の交流の場となっていたと確信している。続いて松井知己氏（中



パネル・ディスカッション

央大) の司会で「SSOR Presentation Award 表彰式」が行われた。これは、SSOR で行われた発表の中から、参加者全員の投票と実行委員の選考により「OR の面白さを伝える」優れた発表を表彰するもので、5名に Presentation Award が、4名に敢闘賞としてそれぞれ記念の楯が贈られた。会場は SSOR に参加した人を中心に、参加できなかった人も含め、1カ月前に芽生えた交流をベースにした和やかで活気のある研究発表の時間となった。

3. 研究発表会：2日目

研究発表大会の前日に記念祝賀パーティが行われたこともあり、今回は恒例の1日目終了後の懇親会が設けられていなかった。それでも場所は六本木。各自で様々な懇親会が催されたようである。そんなことも手伝い、いつものごとく頭にわずかな気怠さを感じながら2日目も一般発表から幕を開けた。

一般講演：「リアルオプション」セッションの小原一仁氏（玉川大・財大学基準協会）による「リアルオプションアプローチの私立大学経営への応用」では、大学経営にリアルオプションを用いるといった新たな枠組が紹介された。高嶋隆太氏（東京大）による「Switchable Emissions and Optimal Timing of Environmental Policy」では、環境政策の実施、解除の選定モデルを構築し、最適な切替えのタイミングの導出が報告された。田園氏（京都大）による「Reorganization Strategies and Valuation of Securities under Asymmetric Information」では、企業の生産コストがもつ情報の非対称性を用いて株式価値を最大化するような企業の価値の評価が紹介された。西出勝正氏（京都大）による「Timing an Environmental Policy Optimally under Economics Considerations」では、国の経済規模や環境汚染の不効用が環境政策に与える影響について考察された。今回、金融工学をテーマとするセッションは8セッションもあり、発表件数も22件であった。どのセッションも参加者が多く、白熱した議論がなされていた。特に、リアルオプションの発表件数が多く、近年、注目されている分野であることを再認識させられた。

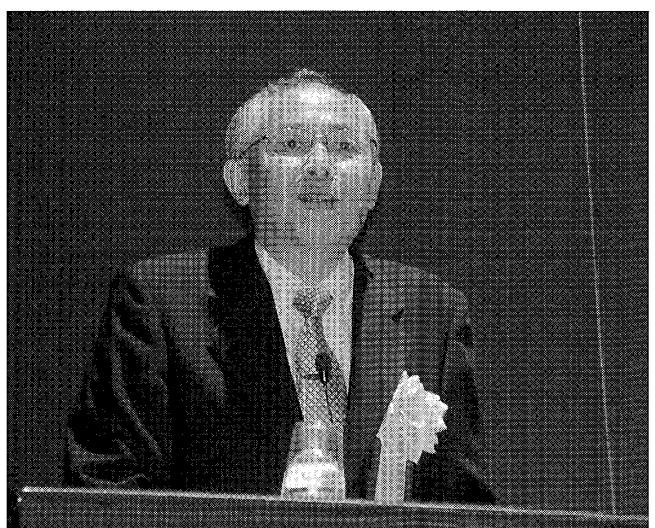
また、「組合せ最適化と応用」セッションの宮本裕一郎氏（上智大）による「最短路高速検索のための階層メッシュ疎化法」では、大規模な最短路問題を、長時間の前処理を下地に、未知のリクエストに対して一瞬で求解することを目標にする、応用がすぐに期待で

きる取組みが紹介された。質疑では競合相手の手法に質問が集中してしまっていたのが少々気の毒であった。続いて宮代隆平氏（東京農工大）による「囲碁における連数最大化問題」では、囲碁のルールを知らないてもすぐに理解できる組合せ問題が提示された。市販のソルバーで解かせるにあたって、うまく制約式を追加することで目標のサイズの問題を解くことができ、そのために現在流通している囲碁ソフトのバグを露呈させたという報告は、聞いていて気持ちのよいものであった。

学生論文賞表彰式：2日目の午後、第25回学生論文賞の表彰式が行われた。平林隆一氏から受賞理由を紹介いただきながら、川島幸之助副会長から賞状が手渡された。18件の応募から選ばれたのは次の7人の論文である。岩佐大氏（東京大）、菊地一哲氏（北海道大）、小宮彬氏（京都大）、大黒健太朗氏（京都大）、高澤兼二郎氏（東京大）、高松瑞代氏（東京大）、流王智子氏（筑波大）。いずれも学生のレベルを超えた優れた内容で、精神的“へこみ”を感じた研究者もいたという噂である。各論文のタイトル等については学会誌へ掲載されたので、是非参照されたい。

特別講演：学生論文賞の記念撮影に引き続き、飯塚雅樹日本ヒューレット・パッカード㈱取締役による、HP社の歴史と経営スタイルについての講演が行われた。

HP社は、古くは測定器、今ではプリンタやPCが主力製品となっていて、我々にも馴染が深い。創業はWilliam Hewlett氏とDavid Packard氏が、ガレージでオーディオ発信器を作りディズニーに販売したこと



特別講演：飯塚雅樹氏

とが始まり、現在では世界中に広まるまでに成長を遂げてきている、まさにアメリカンドリームを実現してきた会社である。1950年代に HP way と呼ばれる社風の誕生があり、60~70年代には安定した成長、日本では横河電機(株)と合弁会社 (YHP) を設立、関数電卓が誕生したのもこのころである。80年代は品質管理にこだわり、日本の YHP がデミング賞を受賞するなどの功績もあったが、90年代の激動、再編成の時代に突入する。

経営を健全化すべく行われた2000年代のコンパックとの合弁に際しては、合弁が白紙に戻っても元の部署には戻れないという約束の下に合併準備を行う専門の部署に人を募り、妥協の産物を排除すべく作業を行った、という話には感銘を受けた。そして我々も知る通り、この超大型の合弁は成功し、黒字化も達成したことである。

講演の後半では、全社員もご覧になるという HP way の解説ビデオが上映された。ここでも HP way という言葉が生まれるだけの理由があると確信した。それは小手先の経営テクニックなどではなく、経営哲学、あるいは人生哲学をも形成するものだと感じた。「会社の目的は貢献することにある」という理念が、前日行われた記念講演の南部靖之氏 (パソナ株) のお話にも通じるところを感じた。OR とは少し離れた話題ではあったが、まことに感銘深い講演であった。

文献賞受賞招待講演：今年度で35回目となる文献賞を受賞された、吉瀬章子氏 (筑波大) による「対称錐上の相補性問題に対する内点写像と同次モデルについて」と題した招待講演が行われた。非常に難しそうな講演になりそうだと予感させるタイトルであり、確かに講演中に“Euclid的 Jordan代数”といった耳慣れない言葉も随所に出てきたが、大切な概念については漫画研究会仕込みの図解付きで丁寧に解説してくださったので、つい分かった気になるような講演であった。

例えば、線形計画問題 (LP) の主問題と双対問題の解の状態 (最適 or 非有界 or 実行不可能) を示した、教科書でよく知られた表に対比させて、LP の拡張である錐計画問題について同様の表を示し、その場合分けの多さをもってどれくらい難しくなっているかにつ



文献賞受賞招待講演：吉瀬章子氏

いて示されるといった具合である。また、吉瀬氏が研究の方向性を考える際に着目した3つの視点（初期点の見つけ方、対称錐の種類、単調性）を軸に取り、3次元空間の図として表現し、「成果を出すのが難しい（と思われる）方向」「実際に採用し成果を出された方向」が図示されており、研究の位置づけをうまく示すための工夫にただ感心するばかりであった。時間の都合上、ご自身の研究についてはほとんど省略となってしまったが、この“初心者に分かりやすく”を心がけた発表スタイルがとても印象に残った。

4. おわりに

今回の秋季研究発表会はルポの執筆のため、両日とも朝から参加し、暑さも落ち着いた9月末の開催ということもあり、いつも以上に研究発表や講演を集中して聴いた。一日が終わると両日とも疲れ果てていたが、とても充実した2日間であり、今後の研究活動への良い刺激になった。

今回の研究発表会が大成功の下に終了できたことは、実行委員長の大山達雄先生をはじめとする実行委員の並々ならぬ努力と協力の賜物である。本研究発表会の準備に携わられたすべての方々に感謝するとともに、今後の研究発表会のさらなる発展を祈念し、本ルポの結びとしたい。